

大月市の『ふるさと教育』についての 報告書

平成31年3月
大月みらい協議会

目 次

- 1 大月みらい協議会への依頼事項及び依頼を受けての取組み方針 1
- 2 【平成29年度の取組み】
大月みらい協議会が示す理念とビジョンの設定について 2
- 3 【平成30年度の取組み】
大月みらい協議会チャレンジ事業 4
- 4 大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念についての再確認 . . 18
- 5 大月みらい協議会 取組み成果発表会（開催報告） 20
- 6 大月市の「ふるさと教育」についての提案 21
- 7 来年度（2019年度以降）の大月みらい協議会の方向性 22

1 大月みらい協議会への依頼事項及び依頼を受けての取組み方針

【市長から大月みらい協議会への依頼事項】

◎大月市の「ふるさと教育」について考えていただきたい。

【依頼を受けての大月みらい協議会の取組み方針】

<平成29年度>

- ①教育現場や地域の現状・課題の抽出
 - ・ふるさと教育についての提言及び具体的内容の検討

<平成30年度>

- ②提言の裏付けとなるチャレンジ事業（お試し事業）の計画
- ③チャレンジ事業の実施
- ④チャレンジ事業の検証
- ⑤最終提言書の作成

2 【平成29年度の取組み（計7回会議を開催）】

①教育現場や地域の現状・課題の抽出（ふるさと教育についての提言及び具体的内容の検討）

- 大月市のふるさと教育に対して、まず「大月市が抱える問題・課題」を出し合いました。その後、3つのグループに分かれて、問題テーマと解決策のアイデアを示した「問題特定シート」を作成しました。その結果、問題テーマを7つに取りまとめ、これを教育委員会に提出しました。

- <問題テーマ>
- ①学力に格差がある
 - ②ふるさと教育とは何か？
 - ③大月市には世界にはばたくための教育がない
 - ④大月を知らない、知ろうとしていない、知っているようで知らない、あきらめムードがある
 - ⑤地域を知らない大月市民
 - ⑥先生が忙しい、家庭が忙しい
 - ⑦子ども達が考える大月って何だろうか？

- 問題特定シートを教育委員会に提出した後、小泉教育長に大月みらい協議会の会議にご出席頂き、大月みらい協議会が提出した問題特定シートについての検討結果及びふるさと教育についての小泉教育長の考えを確認しました。

- 小泉教育長のお話の中では、大月みらい協議会に期待する部分として、「学校・家庭の支援」、「キャリア教育の推進」、「カッコいい大人を見せる」の3つを挙げて頂きました。

- 小泉教育長の考えを踏まえ、大月みらい協議会としての検討課題の絞り込みを行ったところ、委員から出た意見の中で共通している部分に「夢」という言葉がありました。そしてそれは右の相関図のような形となっていました。

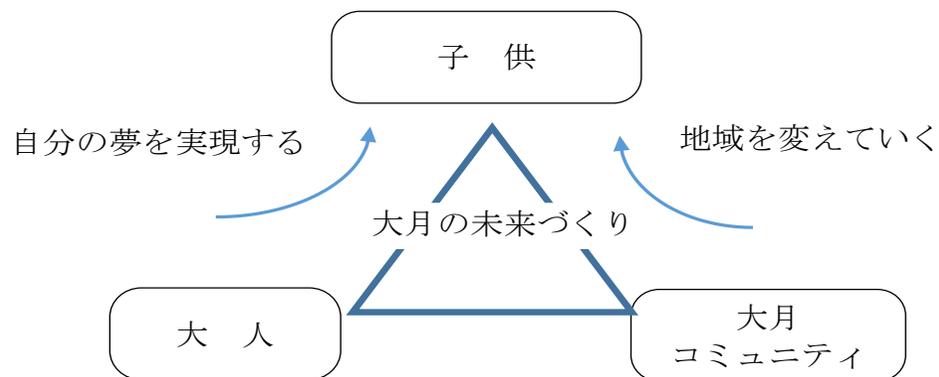


- その後、「夢」という言葉から、大月みらい協議会が捉えるふるさと教育の方向性を収斂（しゅうれん）し、『大月みらい協議会が示すふるさと教育の理念とビジョン』を設定しました。
- そして、平成30年度から、『大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念とビジョン』に基づく、具体的な取り組みを実施していくこととなりました。

【大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念】

「大月ふるさと教育」とは、「大月の未来を創る人」づくりそのものを指す。
具体的には次の2つのビジョンを実現する教育のことである。

1. “子供”の前で「夢を語る“大人”」をつくる。
2. “子供”が抱く「夢を応援する“大月コミュニティ”（＝小さな拠点）」をつくる。



3 【平成30年度の取組み】大月みらい協議会チャレンジ事業

- 『大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念とビジョン』に基づく、取り組みの具体的な実践案を検討した結果、以下の4つのチャレンジ事業を選定し、実施しました。

◎チャレンジA（職場体験）

【グループリーダー】 白川 太 【グループメンバー】 小笠原 則雄、小俣 理美、梶原 崇照、三富 聖久、三枝 良光、志村 賢二、庄司 有紀
【ゴール】

中学校で実施している職場体験を通じて、子どもに、仕事を通じたカッコいい大人の姿を見せ、夢や希望を持つきっかけづくりを行う。同時に、子どもと向き合うことにより、受け入れ側となる企業の社会的役割及び従業員の仕事に対する意識の向上を図り、大人自身が夢や希望を持つことの大切さを再認識させる。

◎チャレンジB（「夢塾」）

【グループリーダー】 佐々木 啓吉 【グループメンバー】 鈴木 昌則、中島 啓介、三木 範之、渡辺 勝
【ゴール】

「夢塾」計画を市教育委員会に提出する。この計画により、市教育委員会に実効性の可否を判断して頂き、実行可能である場合は詳細計画に取り組む。実行性が無いと判断された場合は、計画は終了する。

◎チャレンジC（学童クラブ）

【グループリーダー】 志村 淳 【グループメンバー】 長田 弘、仁科 美芳、福嶋 尚美、山口 明秀、三木 範之
【ゴール】

学童クラブの子供たちが、放課後の遊びの時間を通じて、「夢を抱き心豊かな成長を」との願いから地域の方々の参画を得て、夢につながる種まきとなる土壌づくりとする。

◎チャレンジD（情報発信）

【グループリーダー】 佐藤 茂幸 【グループメンバー】 藤井 真弓、武者 稚枝子、鈴木 昌則、中島 啓介、渡辺 勝
【ゴール】

- ① ふるさと教育の理念にある「夢を語る大人」として、上記要件にある「夢を叶える大月仕事人」を先導的に5名発掘する。
- ② これら大月仕事人に大月市広報を通じて夢を語ってもらい、子供や若者を触発し未来を展望する想像性とモチベーションを養ってもらう。
- ③ また、大月の大人たちに対しても、次年度以降の「夢を叶える大月仕事人」になるべく啓発し、世代間の精神的な交流を深める。

■大月みらい協議会チャレンジ事業 事業内容及び検証結果

◎チャレンジA事業（職場体験）

【事業内容】 大月東中学校の2年生を対象に行われる「職場体験学習」に参画し、以下の3つの取組みを行いました。

●取組み① 「みらい夢カード」の作成

先生方との意見交換会の中で、「ハローワークが出す求人情報みたいな事業所のプロフィール、職場体験のスケジュール、職場体験の内容、事業所の仕事の内容、PR等が掲載されているカードがあると有難い。それを壁に貼れば、子ども達の事業所に対する興味・関心が高まると思う。」という意見があり、チャレンジ事業に賛同する事業所ごとに「みらい夢カード」を作成し、大月東中学校へ情報提供を行う。

⇒賛同事業所である10事業所に「みらい夢カード」を作成して頂き、9月10日に事務局が大月東中学校へ提出しました。



●取組み② 大月東中学校で実施する『職業講話』への参画

学校では、職場体験は、事業所へ行く前には、「働くって何？」ということで、先生と生徒達で対話することから始めている。その中の1コマに、何人かの事業所の方に来て頂いて、話しをして頂き、仕事についての意識付けをする『職業講話』を行っている。その『職業講話』に、チャレンジ事業に賛同する事業所の方が参画する。

⇒10月26日（金）に開催された大月東中学校での「職業講話」に、6事業所の方が参加し、生徒の前で講話を行いました。職業講話は授業の5校時、6校時の時間を使って二部構成で行われ、講師が3つの教室に分かれて講話を行いました。

■第一部講話 13:35～14:15 (5分紹介、講話30分、質疑応答5分)

講話者：大月精工（小笠原委員代理 鈴木氏）、サマーヒルズ（藤井委員）、志仁也（小俣委員代理 小林氏）

■第二部講話 14:35～15:15 (5分紹介、講話30分、質疑応答5分)

講話者：セブンイレブン大月鳥沢店（三枝委員）、山陽精工（白川委員代理 蔦木氏）、富浜精工（志村委員）



●取組み③ 職場体験の中で、夢について子ども達と会話をする時間の設定

先生方との意見交換会の中で、みらい協議会委員から、「職場体験の中で、夢について子ども達と会話をして、夢を語るような時間を設けるとか、経営者の夢を語るとか、社員の夢を語るということは可能か？」ということ質問したところ、先生方はとても大事な事だという認識であるとの回答があった。そこで、職場体験を行う事業所で、かつ、チャレンジ事業の趣旨を理解し、賛同して頂ける事業所に、「夢について子ども達と会話をする時間」を設定して頂く。

⇒大月東中学校の職場体験が11月7日（水）、8日（木）の2日間行われ、その中で、子ども達との「夢」について、会話の時間を設けました。【職場体験 賛同事業所別 大月東中学校生徒参加者数 17名（2年生76名中）】

【チャレンジA事業 検証結果】

●「みらい夢カード」は斬新で画期的な取り組みでした。事業所側では、作る過程の中で、試行錯誤を重ねることによって社員が盛り上がっていきました。

学校側からの意見では、みらい夢カードを貼りだした瞬間に生徒達の人だかりとなり、内容を読んだ直後から「俺、〇〇へ行くんだ！」などの積極的な反応が見られました。また、普段接することのない業種についても様子を知ることが出来、仕事の内容について深く考えるきっかけとなっていました。



●「職業講話」では、子ども達に各事業所の「実情」、「夢」、「仕事に対する姿勢」が伝えられました。それに対して、子ども達は興味や関心を持って話を聞いていました。「みらい夢カード」の事前情報があったことによる関心の高さもありました。

また、講話者に対して複数の生徒の保護者から、「講話が良かった」という話がありました。その場にいなかった保護者から職業講話の話が出るということは、家庭内で子どもとそのような会話があり、保護者が子どもの話に触発されたことを示すものです。

学校側からの意見では、「みらい夢カード」において事前に情報があったことから、生徒達は話の内容に興味を持って臨むことが出来ました。さらには、講話者の話の内容が良く、話し方も上手だったので、子ども達は話に引き込まれていました。仕事の難しさや地道に努力する姿勢に感銘を受ける生徒や、「情熱がすごい！」と目を輝かせる生徒がいました。職業講話後の授業の中では、生徒達から講話で話された内容に影響された発言が出て来る場面あったことや、女子の中に製造業（＝技術職）について興味を持つ生徒がたくさん見られました。

●「職場体験」では、職業講話の後ということもあり、事業所側はより深く突っ込んだ内容の体験を行うことが出来ました。また、「夢」というものを意識した、従来とは違った体験内容となりました。

学校側からの意見では、チャレンジ事業に賛同している事業所に行った生徒は、仕事に対するイメージを持つことが出来ていたため、体験での学びが深かったと思います。また、生徒達は生き生きとした表情で職場体験から帰ってきて、自分の将来について深く考えられた子が多く、自分の夢と事業所を結び付けていた生徒もいました。

●今回の事業は成功したと言えます。成功のスタートは「みらい夢カード」の取り組みであり、そこでの良い流れが、その後の「職業講話」、「職場体験」へと続く中で、学校側（生徒）と事業所側の双方に意識の高まりが見られた結果となりました。さらに「みらい夢カード」、「職業講話」、「職場体験」の順で実施したことも、子ども達や事業所に、内容や意識を深く掘り下げる良い流れとなりました。従来の職場体験学習に、「夢」というテーマを入れることで、子どもが自分の将来を考え易くなり、同様に受入側となる事業所（＝大人）も肩肘張らずに取り組むことが出来ました。

学校側からの意見では、「みらい夢カード」や「職業講話」を含めた事前学習によって、非常に具体的なイメージを持って体験を行い、今までよりはるかに仕事に対する深い学びになっていたと先生方が感じたことや、職業講話の時にも話題に上がっていましたが、身近に知らない仕事や事業所がたくさんあることに気付いた生徒が多く、「大月の事業所がすごい！」という話が出ており、生徒だけでなく、教員も大月を知る良い機会となりました。今後も多くの事業所に参加して頂き、事業を継続して行って欲しいという意見がありました。

【チャレンジA事業 課題及びその対応案】

●今回のAグループのチャレンジ事業に関わったほとんどの方（学校、賛同事業所、委員）から「今後も事業を継続してほしい」という意見が寄せられています。

さらに、この事業は低予算で実施出来て、かつ、効果が大きい事業です。このことから、事業内容は大きな変更は行う必要はないが、今後この事業をどのように継続して実施していくのが課題です。



<事業を継続するための課題と対応案>

課題1. 学校と事業所のパイプ役となる組織（事務局）の設置

⇒新たに参画する事業所に理念や主旨、事業の魅力を伝えるためには、文書の配付では理解は難しく、それを伝える役割として、事業の主旨を理解している現在のメンバーの参画が不可欠です。そして、事業として軌道に乗せるためには時間もかかることから、後1～2年は、現在の体制で進める必要があり、軌道に乗るまでの当面の間は、『大月みらい協議会の継続事業』として実施し、大月みらい協議会の事務局である市（企画財政課）にこの事業の事務局をお願いしたい。今のところ、学校と事業所とのパイプ役は市が適任だと考えます。商工会に事務局をお願いする案もあるが、このチャレンジ事業で培った1年間の経験は代えがたい。



<事業を継続する場合の今後の展開案>

展開1. 賛同する事業所の拡大

⇒現在のメンバーが、市内の事業所に理念や主旨、事業の魅力を伝える声掛けと商工会への働きかけを行い事業への参画を促す。また、仕事には多種多様な業種があり、事業所だけでなく、各種ボランティア団体、研究機関、寺社等、幅広い分野からも参画を促す。

展開2. 猿橋中学校での実施

⇒今回はスケジュールの部分から、猿橋中学校で実施出来なかったため、猿橋中学校でも同様の取り組みを行う。

展開3. 市民への情報発信

⇒はじめは職業講話へ生徒だけでなく保護者にも呼びかけを行う。そして、その取り組みをケーブルテレビで取材してもらい、発信することで、大月市内の多くの人に周知する。併せて「賛同してくれる事業所募集中」ということも発信する。また、チャレンジ事業の他のグループとの連携を図りながら様々な情報ツールから情報を発信する。

展開4. みらい夢カードの拡大

⇒仕事の内容だけでなく、「夢」についての内容を充実させていく。小さな商店等、事業所として職場体験に参画できなくても、事業所の「夢」を示したみらい夢カードを市内の事業所に作って頂く。そしてそれを大人を含めた市内全体に広めていくことで、事業所を知る（＝大月を知る）ことに繋げる。



◎チャレンジB事業（夢塾）

【事業内容】

現在、小学校では「1/2成人式」を実施している。この1/2成人式では、出生から将来の夢まで、自己認識させる行事であり、多くの父兄の認知度も高く評価を得ているものである。この中で、「将来の夢」が語られていることに注目し、その具現化に少しでもサポートするのが「夢塾」の役割となる。

それぞれの持つ夢に対して、学校として個々に支援・指導することは、原則全員、どんな活動もみんなが出来ることが原則となっているから出来ない。このそれぞれの持つ将来の夢支援のため校外活動として「夢塾」を稼働する。

○事務局・組織の編成

- ・大月市、教育委員会教育支援室、みらい協議会で構成。事務局は大月市役所に置く。

○「夢塾」対象児童

- ・市内小学校 1/2成人式参加児童（小学4年生一本年度は121名）

○将来の夢の探索方法

- ・大月市全小学校で実施の1/2成人式での将来の夢を精査
- ・2月ごろ実施(各小学校単位)の1/2成人式後に当該児童の作文入手のうえ、閲覧
- ・入塾は年度の変わる5年生になった時点とし、卒塾は年度内とする。

○将来の夢の採用

- ・作文内容をもとに、夢塾事務局は夢塾への入塾児童の絞り込みをする。ただし、学校以外のクラブ・教室などで、すでに夢に向かって学習・習得している児童は外す。親の職業などを目指す児童も外す。

○担当教師・保護者の見解確認と入塾決定

- ・夢塾事務局は担当教師と保護者と対話し、子どもへの夢の見解を確認する。
- ・また子どもの意思(やる気)を確認のうえ、またサポーター講師を選定のうえ入塾を決定する。
- ・こどもの夢に合致するサポーター講師の選定ができない場合入塾しない。
- ・入塾後はサポーター講師に引き合わせ、原則3回の助言・指導を受ける。
- ・同じ「夢」を持つ児童が複数名いた場合、そのグループ作りをする。
- ・入塾基準を別途設定する。（内容については事務局で詰める）

○サポーター講師の選定

- ・サポーター講師はその分野で著名な人(一流人)が望ましく、現在活躍中で教育・指導に理解ある人を想定。
- ・人材バンク等を通じ大月市関連の人材を中心に選考したいが、現実的にはむずかしい。県・首都圏に求めることも可能とする。サポーター講師への依頼、折衝は大月市が行う。

○講師と子どもの顔合わせ

- ・講師が決定した時、事務局は子どもの作品や保護者の見解を事前に告知し、顔合わせの日時・場所など設定。必要に応じ保護者の同席も可とする。
- ・講師は子どもとの面談・指導を原則3回行っていただく。その後、子どもの夢実現に向けての才能の可能性のための指針に関するセッションをレポートしていただく。それをもって卒塾とする。（レポート・フォーマットの作成）
- ・卒塾後も指導を受けたい場合は、保護者が講師と相談する。
- ・講師への謝礼・足代など、また子どもに係る費用、交通手段・交通費・保険など費用については検討を要する。

■ (H30.5.18) グループ会議 (全体会中でのグループ会議として)

【内容】第1回目のグループ協議として、グループのゴールと具体的計画について検討した。また、佐々木グループリーダーより「夢塾」事業日程が示され、これについての説明と質疑を行う形式で意見を交換し、夢塾構想の共有を図った。

■ (H30.6.11) 教育支援室取材

【内容】第1回目のグループ協議 (H30.5.10) によりグループ委員内で共有した「夢塾」計画について、教育支援室への取材を実施した。

■ (H30.7.20) グループ会議 (全体会中でのグループ会議として)

【内容】みらい協議会において「夢塾」計画についての承認をいただく中で、今後の進め方についてグループ内で協議した。

■ (H30.7.31) 教育委員会への計画について協議

【内容】市教育委員会学校教育課に対して事務局より計画概要等の説明を行い、事業の実行可能性を確認した。(教委預かりとなる。)

■ (H30.9.5) 教育委員会の回答についてグループリーダーへ報告

【内容】市教育委員会学校教育課の計画に関する実行可能性の確認結果に対する市の考え方(教委協議結果)有、グループリーダーへ報告し、今後の協議を行う。

■ (H30.9.6) 教育委員会からの回答に関する協議

【内容】「夢塾」に対する市の考え方(教委確認結果)を受け、事務局代替案として「民間」の作り出す事業化提案の方向性を協議したが、「その子の資質は、現場で直に見る教師以上に見定めすることは困難であるだろう。」ことから計画を作っても、実際の事業化には至らないだろうために、計画を終了することとした。当初、計画したBグループ事業のゴール目標「計画を教育委員会に提出すること」からさらに一步進めた事業としたかったが、終了することとした。

■ (H30.9.14) 計画終了につき委員連絡

【内容】9/6協議につき各委員に連絡し、了承をいただく。

■ (H30.10.25) 教育長面談

【内容】市の教育の現状について話を頂き、以下の5点のような趣旨の話があった。

- ①10歳の時に行う1/2成人式は、子どもの夢を保護者と共有する機会であると学校側では捉えている点と、10歳という年齢は、夢に対して子ども達に成長の発達度合がそれぞれ違いあり、夢塾の企画・原案とおりに中々取り組んでいくことは難しいというようなお話を頂く。
- ②夢塾の子どもの夢を膨らませるということは素晴らしいことですが、1/2成人式の中で、例えば、「夢追い人」みたいな方が、学校に来て子どもとふれあって頂くことが出来れば、一番いいのではないかということ、夢塾の延長線上に考えていたようだ。
- ③子どもの夢に向き合う夢の共有者は保護者、親であり、ふるさと教育のターゲットは保護者であってほしく、地域の人材が保護者にメッセージを送ってもらいたい、つまり保護者を教育してもらいたいというコメントがあった。
- ④現在、発達障害の子どもが増えてきており、市の実際の教育現場、では、先生をサポートする講師が20数名配置して、落ち着いた子ども等に、個別にその中で指導している。
- ⑤今回の提案で共有出来たことは、「子どもが夢を持つことはとても大事なことなので、夢塾をどのような形にしていくなかについては、一緒に考えさせて頂きたいという想いです。」ということであった。

■ H30.10.29) グループ会議 (全体会に先立つグループ会議)

【内容】10/25の教育長面談の結果を含めて夢塾計画の終了について説明し、委員内で教育現場の状況について共有した。

【チャレンジB事業 検証結果】

●教育長面談から

- ・夢塾の取組で示されている「子供の夢を膨らませる」ことは素晴らしいことだと思います。子どもたちにとって、未来像を考えるきっかけになればいいと思います。（「夢を追う人はカッコいい」とか、「夢を持つことは素晴らしい」という思いに子供たちを向かわせるようなことで1/2成人式に織り込むような形でのかかわりがあればいいと思います。そうすれば夢が固まっていない子にも良いのかと思います。）
- ・教育長自身の私的な考えとして、1/2成人式で、子どもたちが本物に出会うことを仕組めたら素敵だと思います。「夢追い人」が学校に来て、子供たちとふれあうようなことがあればいいと思います。
- ・保護者に子どもとのコミュニケーションの大切さを理解していただくような取組があると、子供にとって大きな力になると思います。1/2成人式の取組が、保護者の気づきの機会になればいいと思います。
- ・社会に役立つことの喜びを覚え、社会に役立つことの大切さを教えることは、大人社会の役割だと考えます。
- ・地域全体で「社会に役立つことをする」ようなウェーブが大月市にあればいいなと思います。
- ・学校単位では取組をしていますが、地域全体としてはしていません。大人として、「子供の根っこ」を作ることを大切に捉えて、子どもたちの土台、資質というものが夢の大前提であるという認識で、子どもたちの人間性の基礎としての土台づくりを支援してほしい。
- ・夢を持つ子は、夢のために努力する子で、夢を持つ子に育てたいと思います。夢のある子は頑張れます。何かの形で支援してほしい。
- ・どの子供の個性をも大切に受け止め、全ての子の学習を保障したいと思います。それが個性を大切にすることだと思います。
- ・学校で守備できる範囲は広くない現状で、いろんな方の広い支援がほしい。
- ・子供は人間が好きです。それも親切な方が好きで、そんな素敵な方との出会いがあるといい。そこにいろんな人が入ってきて、いろんな出会いをすることは人間の幅を広げることになると思います。
- ・教育長自身の中でのふるさと教育のターゲットは保護者です。学校で行う子供へのふるさと教育は濃厚にしています。何が必要なのかという寄り添う保護者を育てたいと思います。夢を持つ子を育てることは親を育てることだと思います。
- ・親の応援は子どもに大事だと思います。いつも見方でいてくれることが大事で、こう感じていることが夢を育てることにつながると思います。そういう親になってほしいと思います。
- ・共有できたことは、子供が夢を持つことがとても大事だということ。そのために大人たちが応援してくことも大事だということ。
- ・みらい協議会において、子供のことを考えてくれている方がいることはとてもありがたいです。

【チャレンジB事業 課題及びその対応案】

- 1/2成人式と夢塾の連動が出来なかったことについては、あまりにも大月市の教育現場を熟知していないままの提案であったことであり、今後、提案や立案をする場合、それぞれの現場スタッフ、今回の場合は教育関係者ではありますが、その方々と一緒に席に着き、協議し、立案することが実りある提案になるのではないかと。ただし、1/2成人式において子供が抱いた夢を「いかに叶えるのか」ということについて、教育現場の体制が無いことはあまりにも「もったいない」ことであり、この子供が抱いた夢を大月の宝として、拾い上げ、実現を手助けし、子供を未来に導くような教育現場による取組み、体制づくりに期待します。

◎チャレンジC事業（学童クラブ）

【事業内容】

学童クラブの実情を把握する中で、学童クラブの児童を核とした独自イベントを企画して、次のとおりチャレンジ事業を実践した。

～学童クラブに特化した理由～

現在の大人は子供の頃を振り返り、学校だけではなく地域の支えの中で、自由な時間や遊びを通じて成長してきたが、昨今は少子化の折、子供たちの集う機会が地域に乏しいのが現状である。そこで、一つ目として、「学童クラブが学校教育の場ではないこと」、二つ目として、「学童クラブが地域の方との関わりを創り出せる場」と考え、学童クラブを拠点とする事業とした。

■取組① 学童クラブとは何かを学ぶ

本事業は、学童クラブを拠点として行うため、グループCの委員向けの勉強会を開催して、学童クラブの組織、運営、体制等の現状を学ぶ機会を創る。勉強会では、元学童クラブの先生や所管課である福祉課からの情報を得て、どのような手法で、事業を展開すべきか方向性を探る。

■取組② 事業実施に伴う調整事項

(1) 学童クラブ

市内の学童クラブに対して、「夢シート」と題した調査を行う。調査は、本事業の主旨に賛同が得られるかの意思確認である。賛同が得られた場合、具体的な事業内容について、学童クラブへ訪問調査を行うなどして個々に調整を図る。また、本事業の成果については、年度末の事業終了後に、全学童クラブに報告する。

(2) 福祉課

学童クラブの所管課である福祉課には、本グループにおける協議内容などを伝達して、本事業の進捗状況を報告する。また、本グループの情報発信のツールとして、福祉課主催の学童クラブ支援員会議の場を提供してもらうなど、本事業について協力を求める。

(3) 地域の方

本事業は、地域の方の参画が条件であるため、自治会や公民館などに声掛けを行うなどして、地域の方を探る。なお、地域の方は、基本的には、学童クラブの所在地の周辺住民とする。

■取組③ 独自イベントの企画・実践

意向調査「夢シート」を基に、グループCのオリジナル企画書を作成して、すべての学童クラブと具体的な調整を図るものとする。

■取組④ 事業実施後のヒアリング調査

今後の課題や対応策を探るため、事業終了後に関係者にヒアリング調査の協力を求める。

<事業I> 学童クラブ「たんぽぽ」での読み聞かせ

日時：8月10日（金）9：30～10：20

場所：鳥沢小学校1F

総勢：22名（参加者15名、スタッフ7名）

内容：読み聞かせ

第一話「やってくる」、オリジナル体操、

第二話「子ぎつねこんと子たぬきぼん」



<事業Ⅱ> 学童クラブ「ひまわりⅡ」 “自然散策” ～猿橋地内～

日時：9月25日（火） 9：00～14：00

場所：猿橋地内

総勢：27名（参加者17名、スタッフ10名）

内容：曇天の雨予報の中の「自然散策」を行った。まず往路は概ね予定どおり2時間弱を要して妙楽寺へ到着した。道中では、野草や果樹類、野菜、どんぐり、クルミ、くり、鳥類など、参加者は地域の自然を感じた時間であった。特に、野菜畑では、ミニトマトの収穫体験をさせていただき、児童の表情から、楽しさが伺えた。また、児童らは、樹木に聴診器をあてて木の音を感じ取ったり、くるみを割って食べたり、柿をもいで食べたり、トマトを食べたりと、非日常の場面であったり、収穫の秋であるからこそその体験をした。妙楽寺（宗派：建長寺）においては、住職のはからいで参加者に対し、昼食時にけんちん汁を振る舞っていただいた。昼食後は、座禅体験を行い、貴重な体験となった。



<事業Ⅲ> 学童クラブ「ひまわりⅠ」 “ひまわり村”

日時：11月13日（火） 9：00～13：00

場所：猿橋小学校体育館

総勢：45名（参加者26名、スタッフ19名）

内容：猿橋地区の学童クラブひまわりⅠの児童と関係者らで猿橋小学校の体育館を拠点とするレクリエーションを行った。学童クラブ教室ではお米研ぎとおにぎり作り、体育館では段ボールを使ったトンネル作り、野外テントでは防災意識の動機付けや昼食の場としたり、児童は地域の方との交流を楽しんだ。



<事業Ⅳ> 学童クラブ「たんぽぽ」 “冬のお散歩”

日時：1月10日（木） 8：30～11：50

場所：鳥沢地内

総勢：25名（参加者12名、スタッフ13名）

内容：鳥沢地区の学童クラブたんぽぽの児童と関係者らで、鳥沢小学校の周辺のバードウォッチングを行った。概ね2時間のコース設計として、鳥沢小学校をスタートとして、東は福地八幡神社から西の円福寺の約3kmを散策した。東の福地八幡神社を最初の目的地とした。その後、中央自動車道の側道を西に向かって歩き、折り返し地点の円福寺を目指しました。そして、円福寺で小休憩をはさみ、スタート地点の鳥沢小学校へ向かい、羊を飼っている場所で終わりの会を行った。



【チャレンジC事業 検証結果】

- 市内のフィールドを散策することで、夢につながるスポットを多数発見できたと思う。
- 子供と大人の夢に対する気づきにつながったのではないかな。
- 地域の方が参画したことは、子供と地域の方などの連携が深まり、夢を撒く土壌づくりとなったと思う。

【チャレンジC事業 課題及びその対応案】

(1) 当事業を継続させるための課題

チャレンジ事業の評価を踏まえ、当事業を継続させるための課題として次のことが挙げられる。

- ①地域の方の協力者を見つけること
- ②学童クラブと地域をつなぐパイプ役の設置
- ③市民（地域の方）への情報発信
- ④行政のタイアップ
- ⑤その他
 - ・潜在的な課題の把握
 - ・コーディネーターの育成、団体の立ち上げ
 - ・予算の工面

(2) 課題解決のための対応策

上記(1)に対応して、次のとおり想定する。

- ①大月みらい協議会のメンバーの人脈やさまざまな団体と連携するなどして模索していく。また、市の人材バンクを活用する。
- ②当面は、企画財政課が事務局を担う。
- ③事務局により、さまざま媒体を利用して、事業の認知度を高める。
このことにより、事業の協力者が現れて、自走していく流れが見える。
- ④所管課の協力を以て、事業を遂行することがスムーズな事業展開となる。
- ⑤今後、事業を継続していくことで、対応策を模索していく。



◎チャレンジD事業（情報発信）

【事業内容】

当事業は、こうした「夢を叶える大月仕事人」を発掘し、市内に広報することで「ふるさと教育」に貢献していく事業である。「夢を叶える大月仕事人」とは、大月市に在住または仕事を持っている人で、次の5項目のうち3項目を満たす人とする。

- ① 自分自身の仕事に対して誇りをもって、「キラキラ活動している人」
- ② 若い世代に対して、地域や社会の明るい未来を堂々と「夢として語る人」
- ③ 生き方や思考がスマートで「カッコイイ人」
- ④ 仕事・人生・生活様式・趣味・風貌・言動のいずれかにおいて、大月でオンリーワンの「ユニークな人」
- ⑤ 目立たなくとも一つのことをコツコツ極める「職人氣質な人」

具体的には、次の内容で事業を実施していった。

- ① おおつき広報の2018年10月号から2019年2月号まで、「夢を叶える大月仕事人」（以降「大月仕事人」と表記）とするコラム記事を連載する。
- ② 紹介記事対象の「大月仕事人」を、みらい協議会・チャレンジDグループが5名選出する。（形式上、リレー形式で行うのも一案）
- ③ 高校生・短大生で構成される「若者取材班」（2名）を広報各号において編成し、そのサポートに「みらい協議会」や「秘書広報課」があたる。
- ④ 若者取材班は、大月仕事人に個別ヒアリングし、これをインタビュー形式で記事にまとめる。
- ⑤ 記事掲載後は、各学校での評判や記事活用などの反響をスクリーニングし、大月仕事人が語る「ふるさと教育としての夢の力」を評価する。
- ⑥ 上記活動を通じて、チャレンジDグループの活動を総括し、次年度以降の継続実施の有無を検証する。継続実施の場合は、その事務局体制などを企画する。

（1）第1回・大月市広報H30.10号

- ①仕事人：山地渉（やまじわたる）

【プロフィール】 富浜町在住／大月桃太郎会事務局／大月アスリートクラブ事務局

- ②取材の主な内容：桃太郎＝幸福への方程式（10余年にわたって大月の桃太郎伝説を広める活動をする山路渉氏に活動や仕事を紹介してもらう）
- ③若者取材班：大月短大学生（宮本、高野）
- ④取材場所：大月短大L205教室



(2) 第2回・大月市広報H30.11号

①仕事人：藤井真弓（ふじい まゆみ）

【プロフィール】御太刀在住／サマーヒルズ代表／一般社団法人メリーの会代表理事

②取材の主な内容：大月の可能性を伝えたい！（子育て支援活動を主宰し、その支援活動の輪を他の地域へ広げる藤井真弓さんに活動を紹介してもらう）

③若者取材班：都留高校生徒（木下、阿竹）

④取材場所：都留高校（応接室）



(3) 第3回・大月市広報H30.12号

①仕事人：藤本政幸（ふじもと まさゆき）

【プロフィール】大月町真木在住／大月市観光ボランティア／山梨県自然監視員

②取材の主な内容：山に情熱を注ぐ山のスペシャリス（ボランティアで大月の山々をガイドする「山の達人」藤本政幸氏に活動を紹介してもらう）

③若者取材班：大月短大学生（箕輪、笹岡）

④取材場所：大月短大L205教室



(4) 第4回・大月市広報H31.01号

①仕事人：山崎葉（やまざき よう）

【プロフィール】猿橋町藤崎在住／ガラス作家

②取材の主な内容：「思い」を「仕事」に（大月の自然からのインスピレーションを形にする「ガラス作家」の山崎葉さんに活動を紹介してもらう）

③若者取材班：大月短大学生（持田、宮崎）

④取材場所：山崎氏工房

⑤その他：当日取材模様について夕方の「NEWSかいドキ」で放送された。



(5) 第5回・大月市広報H31.02号

①仕事人：星野喜忠（ほしの よしただ）

【プロフィール】大月町花咲在住／国際ロータリー第2620地区2018-19年度ガバナー／国指定重要文化財「星野家住宅」当主／富士納豆製造所代表

②取材の主な内容：大月から世界へ（地域活力を自分達で作り出す大切さと、地域に残る歴史と文化を次世代に伝える星野喜忠さんに活動を紹介してもらう）

③若者取材班：都留高校生徒（木下、阿竹）

④取材場所：星野家住宅



【チャレンジD事業 検証結果】

① ふるさと教育の理念にある「夢を語る大人」として、上記要件にある「夢を叶える大月仕事人」を先導的に5名発掘する。
→【評価】5名の仕事人を発掘し情報発信ができた。男女のバランス、地域的な網羅性もある程度カバーすることができた。

② これら大月仕事人に大月市広報を通じて夢を語ってもらい、子供や若者を触発し未来を展望する想像性とモチベーションを養ってもらう。
→【評価】取材した若者において、刺激的な経験であったと思われる。しかし、多くの子供達を触発できたまでには至っていない。おおつき広報誌の想定読者は、大人の市民であり、この点では媒体としての限界がある。今後は、今回掲載記事の二次的利用も含めて、小学校・中学校を中心とする、各教育機関の関係媒体による発信を検討する。

③ また、大月の大人たちに対しても、次年度以降の「夢を叶える大月仕事人」になるべくし、世代間の精神的な交流を深める。
→【評価】「大月仕事人」の原型を確立できたことは大いに評価できる。今回5名の発信を足掛かりに、多くの方に「大月仕事人」になってもらえる可能性が確認できた。また、取材を高校生や短大生に実施してもらったことで、世代間交流の方法も検証できた。今後は、対象を小・中学生（子供達）に広めることと、継続的な交流の方法を検討する必要がある。

●若者取材班・大月仕事人・大月市広報担当からの振り返りコメントからの広報

広報に発行後に関係者に対して、簡易なアンケート調査を行った。その具体的内容を、巻末の「参考資料」にまとめている。そこからの確認できた評価を下記に整理した。

① 若者取材班からのコメント総括

→【評価】取材した若者である当事者が、夢や希望をもって仕事をしている大人がいることの気づきを得ており、この点で当事業の目的を具現化できたと評価できる。また、夢の実現の仕方においても、「地域に縛られるものではない」などの感想から、ふるさと教育に関わる若者たちの想像性にも貢献できたのではないかと。そして、（地元育ちの）高校生については、家族・親戚・知り合いから「記事を見たよ」とする多くの反響があったようであり、地域を学ぶことへのモチベーションの効果も検証できた。ただし、（地元外からの）短大生については、ごく限られた関係者からの反応にとどまった。ふるさと教育としての地域コミュニティのことを考えるならば、大月出身の若者（子供）が取材をすることの方が、当然のことながら効果があると考えられる。

② 大月仕事人からのコメント総括

→【評価】5名の大月仕事人からは、事業性の意義について大いに評価をいただいた。また、広報掲載後の反響もご本人たちに対して少なからずあり、情報発信としての効果性も確認できた。これらのことから、大月仕事人としての夢やプライドを明示化させることにおいて、メリットある事業であったといえる。

③ 広報担当者からのコメント総括

→【評価】おおつき広報としての企画の有用性において大いに評価をいただいた。ただし、当媒体だけでは、「ふるさと教育」には十分にいたらないとの厳しいコメントもある。事業の継続性や、記事の利用方法など今後の課題に関わる指摘があった。

【チャレンジD事業 課題及びその対応案】

(1) 当事業を発展させるための課題

上記の評価を踏まえ、当事業を発展させるための課題として次のことがあげられる。

- ① 若者取材班を中学生レベルまでに編成する
 - ・若者取材班として、短大生や高校生においては実証ができた。ただし、中学生については、主体的に質問する能力は未達で難しく、サポートするようなチーム体制の検討が求められる。
- ② おおつき広報の掲載枠を確保する
 - ・隔月掲載など実現可能な企画を再度、提示する。
- ③ 原稿の編集やまとめなどの実務を誰かが行う。
 - ・今回は、企画財政課がその実務を担った。当事業を継続・発展させるためには、その業務を誰が担うかは明らかにできていない。
- ④ 他のチャレンジ事業と連携をとる
 - ・紹介する仕事人は、A～Cのチャレンジ事業の主体者から選ぶと連携が図れる。
- ⑤ 仕事人としてだれが選ぶのか、どう選ぶのか、ルール化する必要がある
 - ・選出方法について再検討する。ただし、基本はだれでも仕事人、たまたま今回はこの人、あなたのいつかは仕事人という形が好ましいのではない。
- ⑥ 子供たちへのフィードバックを工夫する
 - ・おおつき広報に掲載しても、直接、子供たちへのアピールにはつながらない。「カッコいい」大人の発掘にはつながるが、それを子供たちにどのように魅せるかの工夫が必要である。たとえば、仕事人を1年分にまとめて冊子化して配る、学校関連の広報誌やホームページやブログなどの活用があげられる。

(2) 課題解決のための対応策

上記であげた課題を解決させるためには、「夢を叶える大月仕事人・事務局組織」が必要になろう。その機能としては下記が想定できる。ただし、収益事業とはならないため、既存の行政組織や公的機関のなかに発足させることが条件となろう。たとえば、大月短大のなかに、学生主体の組織を立ち上げるなどが考えられる。それにしても、現実的には多くの調整事項があり、時間と労力を要する。

- ① 大月仕事人の発掘・取材企画の機能
 - ・大月仕事人を各地から見つけ出し、媒体掲載を通じて魅力を発信する。
- ② 若者取材班のコーディネート機能
 - ・中学生、高校生、大学生による「若者取材班」を編成する。そのための各教育機関と連携をとり、取材チームを調整する。
- ③ 広報等媒体プロモーション開拓機能
 - ・おおつき広報を含めた媒体の発掘と記事掲載枠の開発を行う。
 - ・また、SNS等のネット系メディアの企画・開発も行う。
- ④ 大月仕事人のデータベース機能
 - ・取材を通じてストックした大月仕事人のデータベースを体系化する。夢の在り方を、地域、年齢、職種など体系的に編さんする。
- ⑤ 子供たち（若者）と大月仕事人の交流機能
 - ・取材以外でも子供達と大月仕事人が交流する場を作る。これには、AやCグループの活動との連携が考えられる。

4 大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念についての再確認

4つの大月みらい協議会チャレンジ事業を実施し、『大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念』について、再確認を行いました。

【理念1】 “子ども”の前で「夢を語る“大人”」をつくる。

【チャレンジA事業】

- Aグループのチャレンジ事業は、「みらい夢カード」、「職業講話」、「職場体験」の取り組みを通して、子ども達に事業所の夢や社員の方々の仕事に対する情熱を伝えることが出来ました。またその結果、子ども、学校、事業所において、子どもや大人が「夢」をテーマに、語り、意識され、予想以上の盛り上がりが見られました。Aグループのチャレンジ事業は、ふるさと教育の理念である「子供の前で夢を語る大人を作る」という理念に、大いに貢献が出来たと思います。
- 子ども達は、自分が行く予定の事業所だけでなく、幅広い大月市内の事業所の話を見聞きすることで、今まで知らなかった新しい大月市というものを見る事が出来たのではないかと思います。また、職場体験中に生徒と夢を語る時間を設定したことで、普段接することのない大人を通して、仕事に関する心構え、将来についての展望、大月市できらきら働いている人がいるんだという事がわかり、自分が将来大月市で働いている未来像のようなものを描けたのではないかと思います。
- 職業講話を聞いていた先生方から、「私たちも聞いていてとても面白かった。」との声を頂き、聞いていた先生方にとっても刺激になるような内容だったことが推察されます。先生方(=大人)にとっても大月市の事業所を知る良い機会になったと思います。

【チャレンジC事業】

- 子供の夢につながる種撒きは、夢を語る大人づくりにつながっていく可能性を感じた。
- 試行錯誤しながら事業を進めていく中で、学童の先生方などに対して、主旨を説明する中で「夢」につながる仕掛けづくりという事業イメージが伝わらず、思案の末「子供の夢につながるサポート事業」を「夢につながる種を撒く」という表現に置き替えてみた。それにより理解が得られ、オリジナル企画書を模索する中で、大人が夢を語れる契機となり、【理念1】の土壌づくりにつながる一歩になったと思う。

【チャレンジD事業】

- 当理念に直結する事業であり、「夢を語る“大人”」の市内広報という意味で評価できる。

【理念2】 “子ども” が抱く「夢を応援する“大月コミュニティ”（＝小さな拠点）をつくる。

【チャレンジA事業】

- 「みらい夢カード」、「職業講話」、「職場体験」の取り組みを通して、Aグループのチャレンジ事業に関わった事業所の社員の方々の成長が見られたという話が各委員からありました。また、職場体験中に生徒との夢を語る時間を設けたことで、事業所の社員の方々の中に、「子どもが抱く夢を応援する」という意識が出て来たことが見受けられたことから、一定の貢献が出来たと思います。
- Aグループの取り組みは、コミュニティを目的に実施したのではないが、大きな予算をかけずに、子どもから大人までの市民だけでなく、学校や民間事業所を巻き込んで、前向きな話しで盛り上がりが生まれました。この状況は理想的な展開であり、この取り組みは、大月みらい協議会の設置目的である「地域の活性化」に寄与し、今後、行政側が求めている市民活動による大月市の活性化に結びつくような取り組みになるのではないかと思います。

【チャレンジC事業】

- 地域の方の参画を得る中で、事業を行ったことは、大月コミュニティづくりの小さな一歩につながったと思う。
- 学童クラブを拠点とした事業設計であるため、「小さな拠点づくり」には、地域の方々の参画が必然となりました。現段階では、地域の皆さんとは、「手伝い」「私に出来るかしら」の事業に参画するところの単発的な協力のもと事業を行っており、【理念2】に向けては、今後の活動を重ねる中で、手探りの遠い道のりと考えている。

【チャレンジD事業】

- 「子供の夢を応援する」までの相互交流までには至っていない。たとえば、若者取材班が、チーム化し、大人との協働がそこに生じるようになればコミュニティの創造につながるかもしれない。

5 大月みらい協議会 取り組み成果発表会 ～大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」について～

●発表会の内容は報告書として取りまとめ、市ホームページに掲載しました。

■日時：2月20日（水） 18時～20時

■場所：大月短期大学 岩殿ホール

■参加者：約80名

- 1 主催者あいさつ（志村 淳 議長）
- 2 来賓あいさつ（石井大月市長）
- 3 大月みらい協議会の取り組み成果発表について
（チャレンジ事業の発表）進行：佐藤 茂幸 副議長
【導入】大月みらい協議会が示すふるさと教育について
発表者：小俣 理美 委員
【チャレンジA】 事業テーマ：職場体験
発表者：小笠原 則雄 委員
【チャレンジB】 事業テーマ：夢塾
発表者：三木 範之 委員
【チャレンジC】 事業テーマ：学童クラブ
発表者：志村 淳 議長
【チャレンジD】 事業テーマ：情報発信
発表者：中島 啓介 委員
【意見交換・まとめ】 佐藤 茂幸 副議長
- 4 講評（小泉教育長）



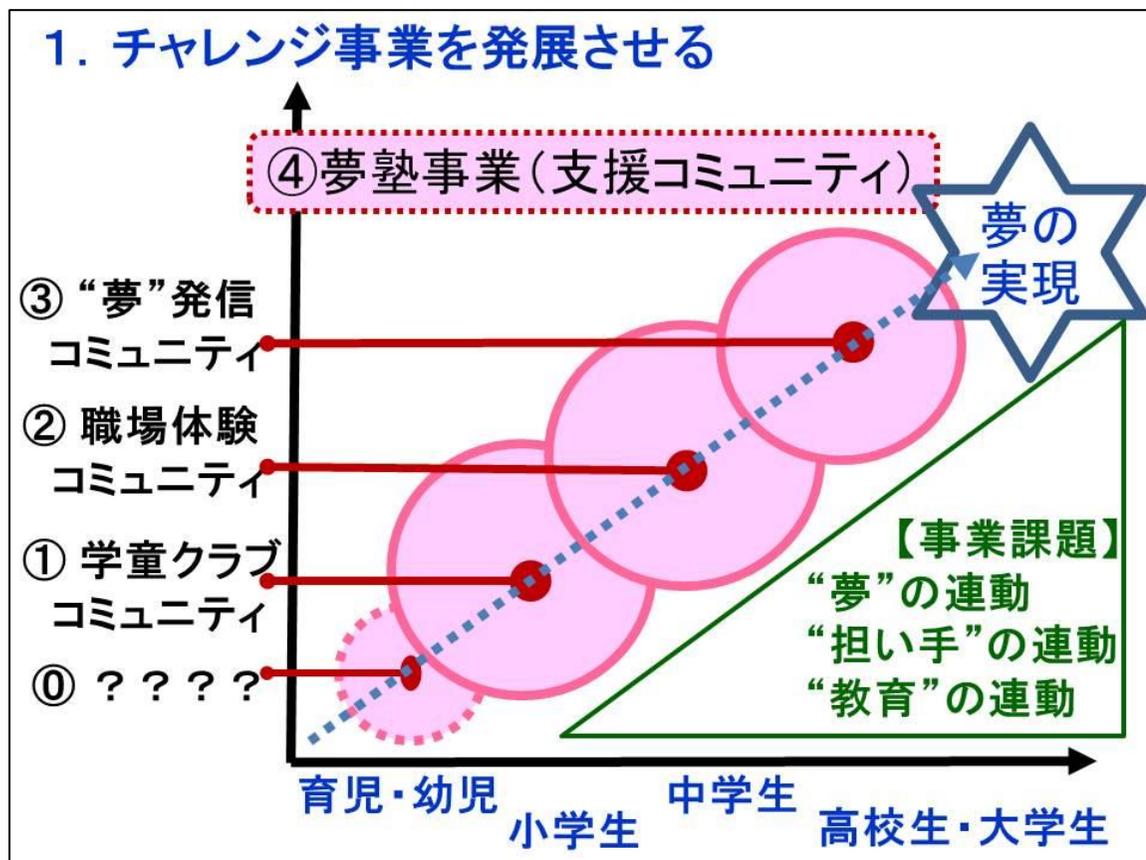
6 大月市の「ふるさと教育」についての提案

大月みらい協議会は、チャレンジ事業を実施したところ、設定した理念に可能性を感じたことから、これまでのチャレンジを発展させ、より実現性の高いものとするために次のような提案を行います。

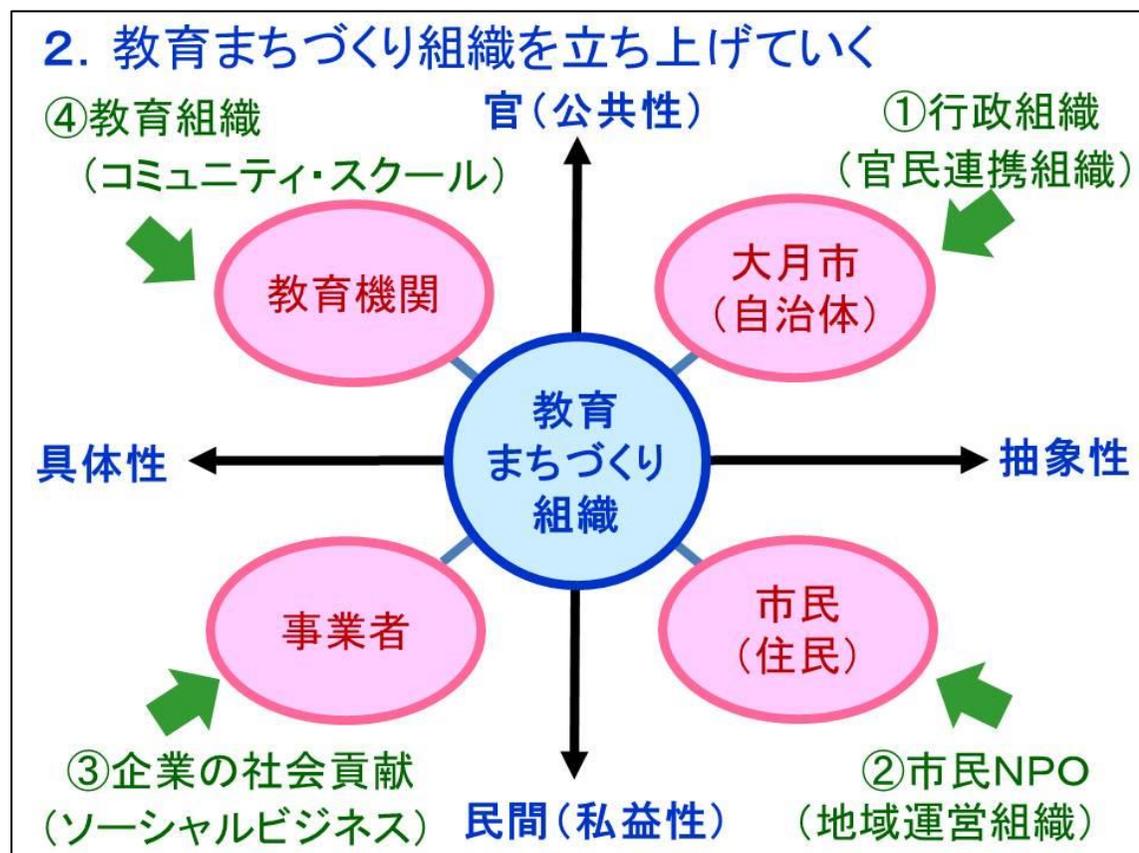
【大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念】を推進していくための提案

1. 大月みらい協議会チャレンジ事業の事業展開のあり方

- 平成30年度に実施した大月みらい協議会チャレンジ事業（職場体験、学童クラブ、情報発信）のチャレンジ内容を組み合わせ、学校・地域・事業所・市民と連携を図り、新たな事業展開を検討しながら実施していきます。



2. チャレンジ事業を長期的な事業とするため、新たに創造する組織のあり方
- 行政以外で代替えできるNPO法人、一般社団法人等の組織化を検討していきます。



7 来年度（2019年度以降）の大月みらい協議会の方向性について

- 大月みらい協議会チャレンジ事業を継続して実施し、発展させていきます。
- 教育まちづくり組織の立ち上げを検討していきます。